Sonia Delaunay の作品集

図書館司書二課　小松　万紀

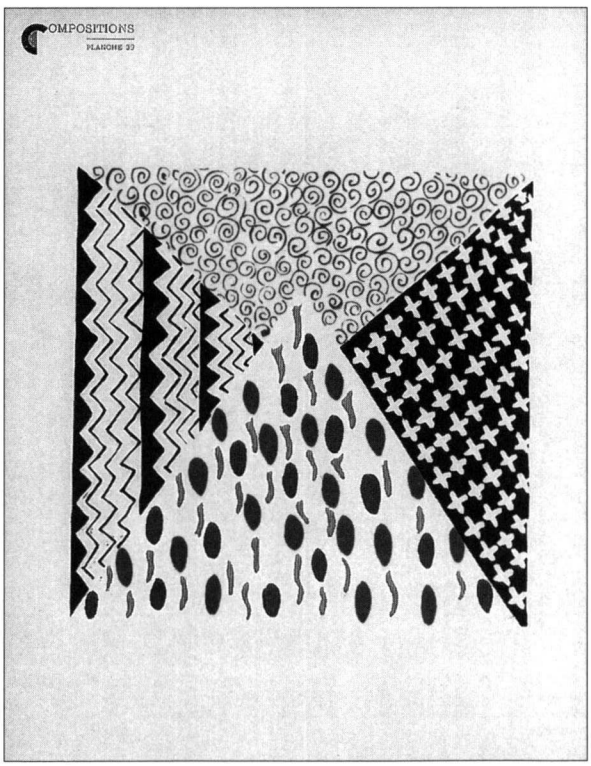
近年、造形作品を主として展示してきた美術館において、これまで異分野としてみなされていたファッションが、展示テーマとして取り扱われるようになってきた。また、それと共にアートとファッション、両者の関わり合いを主題とする論文も目にすることが多くなった。[1] ここに紹介するソニア・ドローネー（Sonia Delaunay 1885-1979）は、20世紀初頭のこのようなテーマを研究するうえで、見逃すことのできない存在であろう。

1885年ウクライナに生まれたソニア・ドローネーは、1905年に画家を志してパリに出た。そしてその3年後、ピカソやブラックを早くから見出した批評家であり、コレクターでもあったヴィルヘルム・ウーデ（Wilhelm Uhde 1874−1947）と結婚する。ウーデとの生活は2年で終わり、次に画家ロベール・ドローネー（Robert Delaunay 1885−1941）と再婚し、二人は生涯を共にした。ロベールは「キュビスムの諸原則を色彩に適用した〝色彩のキュビスト〟」[2] であり、彼の表現理論はソニアにも大きな影響を与えている。また、当時ヨーロッパや東欧で現れた前衛芸術家との交友関係は、ウーデ、ロベールを通じて広がっていった。ソニアの日記[3] にはキュビズムのピカソやブラック、ロシア構成主義のマレーヴィッチ、未来派のバッラ、マリネッティ、デペロ、ダダイズムのトリスタン・ツァラなどが友人、知人としてたびたび登場し、彼女が今世紀初頭の前衛芸術の只中にいたことを物語っている。

本学図書館では、ソニアのいくつかの作品集や伝記を所蔵している。既刊の図書館だより（110号1995年10月号）で『Sonia Delaunay, ses, peintures, ses objects, ses tissus simultanés, ses modes＝ソニア・ドローネー、その絵画・実用芸術・同時対比染織と衣装』〈593.087-D〉を紹介しているので、ここでは他の2点をとりあげる。

一つめは、1930年に刊行された（1926-27という説もある）『Compositions couleurs idees＝構成・色彩・アイデア』〈K757.7-D〉である。ポショワール（型刷）で刷られた39枚のコンポジションがポートフォリオに収められ、その表紙には、ソニアが絵画の中で多用する円弧がデザインされていて、印象深い表紙となっている。

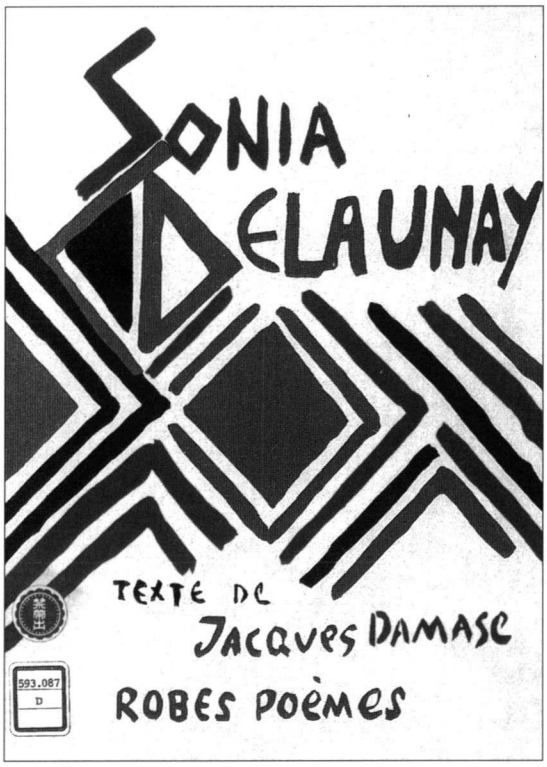
ソニアは1920年代中頃から、自らのブティック「ソニア・ドローネー　シュミルタネ」のデザイ



『Compositions couleurs idees＝構成・色彩・アイデア』

ン活動をしながら、リバティ商会の代理店でもあったオランダの高級百貨店「メゾン・ド・メッツ」の仕事も行なった。ここでは家具やテキスタイルのデザイン及び多数の試作デザインを提供している。『構成・色彩・アイデア』は彼女のそのような時代を表すかのように、一点一点が美しいテキスタイルデザインとも見うけられる。

次に前出にくらべ、ごく新しい1969年刊の著作であるが、是非紹介したいのが、『27 tableaux vivants ＝生き生きとした27枚の絵画』〈593.087-D〉である。A4判の朱色の布地に Sonia Delaunay のブルーの文字が鮮やかな帙、その中には、経本折（アコーディオン折）で本書が納められ、洒落たブックデザインになっている。布製の白い表紙にはソニアのコンポジションや手書き文字で「Robes poèmes」などの言葉がプリントされ、最後のページには直筆サインが、ソニアは青文字、ジャック・ダマーズ（Jacques Damase）は赤文字



『27 tableaux vivants＝生き生きとした27枚の絵画』

で記されている。ジャック・ダマーズはソニアの1964年から晩年までの展覧会や出版物を数多く手がけた人物である。

ソニアは前衛画家のほかにギョーム・アポリネール、トリスタン・ツァラなど多くの前衛詩人と交友もあり、そのうちの何人かと競作という形で作品を作っている。最も有名なものとして、長年の友人でもあった詩人ブレーズ・サンドラルス（Blaise Cendrars 1887−1961）との競作『シベリア横断鉄道とプティット・ジェアンヌの散文詩』があるが、本書はこのサンドラルスの詩とジャック・ダマーズ、アポリネールの文章にソニアの1920年代に描かれた27枚の衣装の絵を組み合わせたものである。今世紀初頭、未来派、ロシア構成主義、ダダイズムの作家たちが“着るアート”をいくつか制作しているが、本書に見られる作品もまた、これに含まれる。ソニアは芸術とデザインが2つの別々の世界で表現されるのではなく、それぞれに影響し合って表現されることを実践したパイオニア的存在であったと言えるであろう。

これより前の1966年には同じくサンドラルスの詩で『リズム-色彩』が、またこのほか1956〜1977年の間にはツァラの詩で『許された果実』『ただ在りて』『ガス芯』が、アルチュール・ランボーの詩で『イリュミナシオン』がソニアの装丁と挿画で出版されている。

1）『Revolutionary costume』〈383.138-R〉『Europe 1910-1939』〈383.13-E〉、『Mode & art 1960-1990』〈593.087-M〉、『Art & mode』〈593.087-G〉、『ファッションとシュルレアリスム』〈593.087-M〉、『身体の夢』〈593.087-S〉、服飾専門誌『服飾研究』、『Fashion Theory』など、図書館でも多数関連資料を所蔵している。

2）『オックスフォード西洋美術事典』による。

3）『ソニア・ドローネ』〈723.35-D〉竹原あき子著　星雲社刊